



神聖かまってちゃんが紅白歌合戦に出たいという理由

———ニートの戦う居場所と意義をさがすけもの

戦いが始まる時、まず失われるのは、若者の命である。そして、それが報われることはない。

(映画『仁義なき戦い』の印象的なナレーション)

どんなに気をしっかり保っているつもりでも、
長年にわたるひきこもり生活は、確実にひきこ
もり者の精神をむしばんでいく。



肉体と精神が廃れていく毎日は、思いのほか心安らか。↓

だが、この乱れていく生活、寝て起きて妄想して昼が夜になり朝が昼になる生活が、日に日に心地よくなっていくこともまた事実で。肉体と精神が廃れていく毎日は、思いのほか心安らか。わたしはこのクズ人間ロードを、もうずいぶん遠くまで歩いてきてしまった。

引き返せるだけの猶予が残されているかどうか、今ではもう、それすらも定かではない。

レールから外れてしまっただけならまだしも、そこにルサンチマンが発生しているならへたなプライドだけがただ肥大して、現実とのはざままで心が疲弊していく。

何かのため↓

何かのために戦って死ねたらどんなに良いだろう。

自分の命をかけるだけの何かを与えられた戦時中の若者がうらやましく想うのはわたしだけではないだろう。現に、『永遠の0』は映画が大ヒットしている。原作本は週刊少年ジャンプ『ワンピース』の最新刊の発行部数を抜いて、四〇〇万部を突破しているという。

映画『仁義なき戦い』↓

ニートとほど遠いが親和性を感じさせる映画がある。

映画『仁義なき戦い』（一九七三）だ。やくざたちの抗争を描いた映画である。やくざ同士の抗争を題材にしながら仲間を裏切り、裏切られることでしか生きられない若者たちが描かれている。しかし、角度を変えてみるとこの映画は第二次世界大戦が終わったあと、戦う意義を失いその闘争のプライドだけ残って肥大化した若者を満足させる擬似戦争の映画なのだ。戦う意義だけ空虚に残ってなにも起きないし起こせない自分に心が疲弊していった若者にとってのヒーロー映画である。

日本には内戦がない。だから命をかけて戦う舞台がない。たとえ擬似で戦争映画を作ったとして説得力がない。そこで、実話をもとにした殺し殺されての話『仁義なき戦い』が若者の闘争本能を満足させるものとして機能した。

第二次世界大戦は終わった。命をかけて戦場へ行っていた男性が平和な土地に戻る。しかし、男とは悲しい生き物で、戦いを求める。それはニートだろうが、貴族だろうが、ヤンキーだろうが関係ない。男はロマンを求めてしまうのだ。

脚本がつかこうへい、監督が深作欣二の映画『蒲田行進曲』（一九八二）がある↓

脚本がつかこうへい、監督が深作欣二の映画『蒲田行進曲』（一九八二）がある。内容をざっと紹介しておく。映画の撮影所で物語上、階段落ちのシーンが必要になりだれが落ちるか選択を迫られる。スターの銀ちゃんは今後も飛躍するため身体を壊す（良くて半身不随、悪くて死亡）ことはできなかった。恋人と子供ができたエキストラのヤス（平田満）はその階段落ちに志願する。



ヤスは恋人と子供のために階段落ちをするようにみえるが、本編をみるとそうでもない。そしてよく考えてみると、本当に家族のためなら良くて半身不随といわれる階段落ちをするはずがないのだ。保障もない家族が残されてしまうからである。本当なら役者を辞めるはずである。

それまでのヤスは、「銀ちゃんが輝くなら自分は影のままでもいい」という趣旨の発言をしていた。自分がスターになることを望んではいなかった。

自分にとって嫁と子供ができたとき、ヤスは家族を養うため、銀ちゃんのために階段落ちを行う決意をする。しかし、それまでヘラヘラしていたヤスだが、階段落ちの時期が迫ると気がたって部屋のなかで暴れたり、嫁を突き飛ばしたりしてしまう。

それはスターになれないと諦めていた自分が↓

それはスターになれないと諦めていた自分が初めて自分自身と対峙した表れである。時がたつにつれヤスは本物のスターの雰囲気を持っていく。

最初こそ家族のため、憧れの人のためと決意したことだったが、階段落ちのときにはもはや全存在をかけていて、自分自身のためにシーンに挑もうとしていた。誰のためでもない、自分のロマンをヤスは再び取り戻していた。

何者にもなれなかった人間が何者かになると決意 (そして決定) したとき、そのものになっていた。

例えば、いま何故か↓

例えば、いま何故かニューオーダーというグループで活動している須藤元気にこんなエピソードがある。彼は中学三年のとき総合格闘技UFCを見て、強くなってこの大会に出ようとする。須藤はそれを実現するため、レスリング経験なしにも関わらずレスリング部にある高校に進学。そこにはレスリング推薦で入学してきた同級生が一〇人もいた。なのに高校で全国三位になる。短大ではジュニアオリンピック日本代表となり、卒業後は日本に身をおかず渡米する。

須藤は、「一流の人が集まる場所に身を置いたり、常に一流の空気、あるいは波動に触れるようにしていると、自分もだんだん一流になる」と語っている。

つい先日テレビを点けたとき、お笑い芸人が「高い家賃の家に住むとその分仕事が入ってくる」という都市伝説がお笑い芸人の世界にあると語っていた。それと似ている気がする。

蛇は脱皮するときに涙を流すという。↓

蛇は脱皮するときに涙を流すという。



蛇は脱皮するときに涙を流すという。

脱皮しなければ生命は擦り切れて終わる。神聖かまってちゃんは明らかに変化した。ニートや精神薬漬けの自身の日常をガツガツと曲に塗りたくっていくのが当初なら、いまは自身のパーソナルな部分を切り取って遠くに届けようという意志がみえる。

二〇一三年にユーチューブにアップロードされた楽曲フロントメモリーの冒頭はこうだ。



きっと退屈だけど↓

楽曲フロントメモリーの冒頭はこうだ。

きっと退屈だけど

きっとアンニュイだけど

屋上でまた崩れかけてる

の子の既存のメンタリティがここに現れている。彼は常に絶望から出発しているのだ。次に続く歌詞はこう!!! ↓

H i p H o p なフリし t 自分とギリ生きている
会話も了解ですメールすらも居留守して1人歩いた
iloveyouって英語で習ったんだっけ？

うーむ。まだ絶望している。徹底的に自分は孤独であることを示しているのだ。しかし、その次
はこう!!!↓

夏SUMMERTime

八月駅降りて

田んぼで叫んだりして

Comeonbaby yeah!

駅に降りた！いままでの子ならば電車に乗ったままのはずである。↓

駅に降りた！いままでの子ならば電車に乗ったままのはずである。

例えば、初期の曲『美ちなる方へ』のPVは進む電車のなか揺られている人物が映される。これはある空間に閉じ込められて脱皮を余儀なくされている人物の心の揺らめきを表している。

『フロントメモリー』のPVでは太陽がさんさんと照っている真夏外にの子がいるところから始まる。そこから次々と場面転換が行われた。過去のPVで使われたコンクリートの壁を訪れたり、楽曲『学校に行きたくない』という曲で学校が好きではないことが示されているにも関わらずの子は学校の教室を訪れている。

の子は当初閉じていた空間にいた。『フロントメモリー』のとき、の子は始め日が照りつける外にいる。過去の楽曲PVの場所を訪れるということは、自分がいる場所が変わったことを示している。

過去曲PVの場所というのは過去曲を聴いてくれているリスナーという隠喩だ。そこへの子が訪れるということは興味深い。元々リスナーと親和性が高かったの子だったが、今は自分からリスナーのもとへ行かないと繋がれないという様子がみてとれる。

神聖かまってちゃんは二〇一四年に一年間の予定を発表した。↓

神聖かまってちゃんは二〇一四年に一年間の予定を発表した。彼らは今年攻めている。恐らくインターネットを使ってロックシーンに殴り込みにきた当初ほどのファン層の開拓とインパクトを再び起こすことはむつかしい。



彼らは戦いに勝とうとしている。↓

彼らは戦いに勝とうとしている。だからテレビに出たいとも紅白歌合戦に出せとも主張もしている。メジャーシーンのど真ん中に入り込めば神聖かまってちゃんは覚醒する。彼らはいつまでもアンダーグラウンドのような場所でたらたらとやり続ける気はないだろう。日本中の異能の才能が集まるテレビにいき、彼らはその磁場を吸収しようとしているのだ。『フロントメモリー』がいかにかに外に向いた曲かと考えればわかる。

ニートの戦う意義と居場所を彼らは作ろうとしている。われわれにロマンを見せようとしているのだ。

神聖かまってちゃんは戦うニートである。←

うおお

神聖かまってちゃん

<http://p.booklog.jp/book/92083>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/92083>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ